＜＜東北魂＞＞を鼓舞する
電子新聞

発行所　株式会社遊無有
〒 207-0015
東京都東大和市中央 1-539-15
http://www.yumuyu.com/
e-mail:y.s.yumuyu@ozzio.jp

東北再興

Re-Create , TOHOKU!

無料

第129号

毎月発行

発行 2023 年（令和 5 年）2 月 16 日　木曜日

2 0 2 3 年（ 令 和 5 年 ）2 月 16 日　木 曜 日

【当新聞発行責任者兼編集長兼記者紹介】

【砂越　豊】

宮城県生まれ、69 歳の新人歴史映像作家兼プロデューサー。3 作目の「古代製鉄の埋もれた歴史を発掘した映像」の【奪われた古代鉄王国】の大崎上映会は延期。とはいえ新型コロナ禍を乗り越えて４作目制作に向けて奮闘中。趣味は古代史・縄文文化研究。埋もれた歴史を発掘することと東北から日本を変えることを標榜。

【福島と石巻のその後】
7年ぶりの現地取材でとても驚いたこと！
今の福島の現状を知らずに原発再稼働？

久しぶりの福島取材でとても驚いてしまった

ここのところの目先の忙しさにかまけて、ずい分と東北被災地取材をして来なかった。

現地を訪れたとしても、せいぜい遅々として進まない被災地の復興状況を再確認する程度であろうし、そんなに大きな変化もないだろうと甘く考えていたためであった。

とはいえ、前回取材から大分時間が経っているし、これ以上の間隔を空けるわけにはいかないと、先月中旬、福島県の富岡町を中心とした地域と宮城県石巻市の状況を見に出かけた。

ところが、福島に行ってみて、腰を抜かすほど驚いてしまった。

「なんてことだ！」というのが、その光景を見ての最初の正直な感想である。

言葉で説明してもうまく伝わらないだろうと直感的に思ったこともあり、「証拠写真」をたくさん撮り、それを掲載したので、現地の状況がどんな風になっているかをまずは見ていただきたいと思う。

富岡は帰宅困難地域だらけだった

早朝の電車で、まずいわき市へ向かった。そこでレンタカーを調達して国道六号線を北上した。

訪問順番は、最初に、富岡町の浄林寺におじゃまし、その後に福島第一原発の近くまで行くことにした。

その後の原発の状況を遠くからでもいいので確認したかったのだ。

遠くからでもいいというのは、最初から福島第一原発に接近するのは無理と覚悟していたからだ。

＊

浄林寺の話は後述することにして、先に、取材で直面した驚くべき現地の実態から記載する。

浄林寺訪問を終えてさらに北上して、国道六号線から海岸線に出て、なるべく福島第一原発の近くまで行こうとして脇道に入った途端に「帰宅困難地域につき立入禁止」の看板に「侵入」を阻止された。

近くにある他のルートにもトライしてみたが、どのルートでも「帰宅困難地域につき立入禁止」の看板と警備員に通行を阻まれた。

以前の取材では、福島第一原発のすぐ近くには検問所があり、通行許可証を持たない限り、当然ながら近づけなかったが、今回は、福島第一原発から十キロ近く離れた場所にもかかわらず、「帰宅困難地域」に加えて「立入禁止」となり通行不可だった。

筆者は、まずこの事実に非常に驚いた。

そして、「帰宅困難地域」の看板手前から垣間見えた、進入禁止エリアに壊れたまま放置されている建物にも驚いた。もう大震災から十一年以上経った富岡町の風景とはとても思えなかった。

はるか向こうまで大量に山積みされた放射能汚染物質がぎっしり詰まった黒い袋の山

【東北再興】掲載の記事・写真・図表などの無断転載を禁止します。Copyright YUMUYU INC. All rights reserved.

マスメディアは真実を伝えているのか

ここ数年は、福島第一原発を取り囲むエリアは、放射能の影響が大分薄れてきた外側地域から、元住民の「帰宅」が強引ながらも政府主導で進んでいるものとばかり思っていた。当然ながら、富岡町もそうした「帰宅」が進んでいるとばかり思っていた。

それなのに、大震災から十一年以上経ったいま、かつ、今から七年前の二〇一五年の夏に富岡町におじゃましたときには、除染作業が開始され、「帰宅困難地域」にされていたとはいえ、富岡町内の通行は自由だったにもかかわらず、いまは「帰宅困難地域につき立入禁止」となり、むしろ状況が悪化していたのだ。

この事前の楽観的なイメージと、現地取材のギャップに非常に驚いてしまった。

当新聞もメディアの端くれであるが、今回の驚きは取材をさぼっていたことを大いに反省させることにも直結した。

それとともに、マスメディアからの情報は、何か事が起きたときはワイワイ騒ぎ立てるが、その後はニュースバリューがなくなると、「放置」されるということも痛いほどに分かった。

結局のところ、自分の足で現地に赴き、自分の眼で確かめる以外に、「真実」は把握できないとまで思った。

福島取材関連地図

さらに驚く放射能汚染土の山

驚きはこれに留まらなかった。

「帰宅困難地域につき立入禁止」の看板から、ほんの少し入った横道の北側には、「放射能汚染土」がぎっしり詰まった黒い大きな袋が、山のように積まれ、見渡す限りに広がっていた。

そのエリアだけでもいくつあるのだろう。

とても数え切れる量ではない。しかも、見渡せるエリアだけではないだろう。

見えない場所にも積み上げられているだろう。

おそらく、この「放射能汚染土」がぎっしり詰まった黒い大きな袋は何千どころか、何万、いや何十万袋も放置されているのではないか。

そうした袋の上には、丈の高い枯れた草がたくさん見え、風に揺れていた。

「何たることか」。想像をはるかに超える「放射能汚染土」が行き場を失い、その一帯に放置されているのだった。いや、どんどん増えているのだろう。

しかも、これは富岡町だけではあるまい。

他のエリアにもこうした放置された「放射能汚染土」が何十万袋と積まれていることだろう。

取材前の筆者をはじめ、こうした現実があることをほとんどの国民が知らないのである。

あちこちに立つ帰宅困難地域の看板

この現実を無視して「原発再稼働」？？？

話は一転するが、ロシアによるウクライナ侵攻により、世界の原油と天然ガスの価格が高騰したのは誰もが知っている。

それが、世界の電力料金高騰とガス料金高騰に直結し、日本でも大騒ぎである。

価格上昇の程度も尋常なレベルではない。さらに今後も上昇を続ける可能性が大きく、国民みながおびえている。

生活困窮に陥っている人々はさらに深刻である。もはや、経済的な大問題というレベルを超えて、生活継続の危機に陥っている。

天然ガスは日本ではどうしようもない。仕入れ価格次第であり、日本の努力外の問題である。

しかし、電力は日本でもなんとかしようのある課題である。

そこで出てきたのが、原油に頼らない電力生産としての原子力発電所の再稼働である。

原子力ならば、原油価格の上昇とは無関係に発電できる。原油よりも安く生産出来ると思われている。

これまでも原子力発電所の再稼働を望む「声」は上がってきたが、「福島第一原発の放射能漏えい」の記憶が鮮明なために、その「声」は幾度となく打ち消されてきた経緯がある。

しかし、今度は、国民全員の目先の生活の問題に直結している。

そうなると、「先々の原発リスク」よりもいまの生活の安定を望む「声」が増えてくる可能性が大きくなるだろう。

そしてマスメディアもそうした「声」を煽っている。

それだけでなく、今決めなくてもよいと思われる「原発六十年稼働」もこの機に乗じて強引に決めた。

こんな空気がまん延する日本だから、この記事は無視されるであろうが、もしこの富岡町の現実があることを知っても状況は変わらないのだろうか。

福島第2 原発遠景と堤防工事

この記事で福島の復興がさらに遅れる？

取材を終えて東京に戻ってから、この記事を書こうか、どうしようかと非常に迷った。

なぜかといえば、せっかくここまで、福島の風評被害に立ち向かい、十一年以上もの長く苦しい放射能漏えい問題との戦いをしてきた福島県関係者に、「ふりだしに戻る」ことを余儀なくさせるのではないかと思ったからである。

しかし、福島県関係者にはまことに申し訳ないが、この目で見たことを「なかったこと」にはできない。

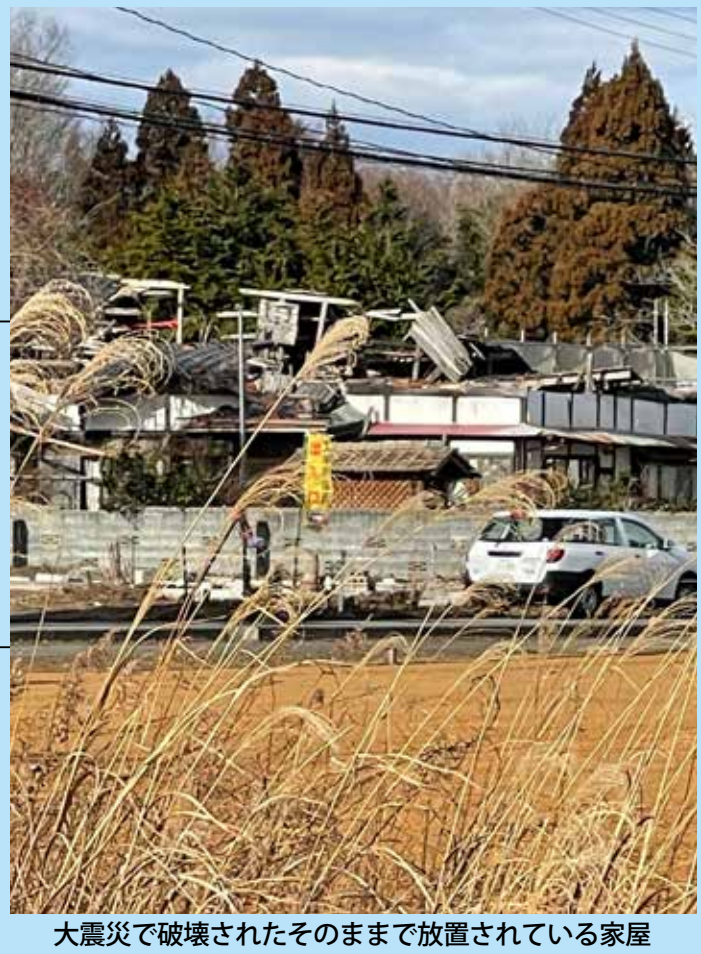
やはりこの国に実情を知らせなければならないと思い直して、この記事を書いている。

当新聞の影響力は非常に小さく限定的なものであるから、それほどの反響があるとは思えないが、この記事を読んだ方々は、少なからず大きなショックを受けることだろう。

そして福島の放射能汚染除去は少しも進んでいない、それどころか、むしろたくさんの帰宅困難者をいまも産み出している現実がじわじわと広まるだろう。

結果として、当新聞が望んでいることではけっしてないが、小さくなりつつある福島の風評被害が再び大きくなるかもしれない。

それでもこれは伝えなければならない。


大震災で破壊されたそのままで放置されている家屋

再生エネルギーはどこへ行った？

それにしても、と思うのである。

かつて、民主党政権の時代に、原発から再生エネルギーによる電力生産へと切り替えよう、なかでも太陽光発電を国中に普及させようということがあった。

かなりのスピードで国内に浸透した。原子力に頼らず、安全な再生エネルギーに切り替えが進むと思えた。

しかし、自民党政権に移った途端に、この流れが急にストップした。民主党が行った政策だからということで、潰しにかかったのだろうか。

経済産業省の定める売電単価が、年々ハイペースで切り下げられた。10kW以上のカテゴリーでは、

【東北再興】掲載の記事・写真・図表などの無断転載を禁止します。Copyright YUMUYU INC. All rights reserved.

福島・富岡町　浄林寺

【笑い仏さん】

浄林寺ご住職

二〇一二年度までは42円だったのが、二〇一三年度は37・8円、二〇一四年度は34・56円と急降下した。

たった3年で売値が18％も減額されたうえ、将来的にもさらに下がることはあっても、上がることはないと見込まれたため、太陽光発電熱が冷え込むのは当然である。そして太陽光発電はもう終わったとする空気が満ちていったのだった。

しかし、電気料金高騰のいま、太陽光発電を元の状態に戻して、電力料金の引き下げに活用しようという声は出ないのだろうか。

残念ながら、何が何でも原子力発電なのである。

そこに大きな利権が絡んでいるためだろうか。

政府、電力業界、マスメディアの三者連合による強力な誘導があるような気がしてならない。

このままでいいのか？

この問題に関しては、以下のことを再度指摘して締め括ろう。

現時点における大震災がもたらした放射能漏えいの真実を知らないまま、原子力発電に突っ走ってもほんとうにいいのだろうか。

可能ならば、全国民が富岡町の現実を知ったうえで、原発再稼働の是非を判断して欲しいのだが、それは実現しないだろうか。

【笑い仏】さんに再会

当新聞の第三号（二〇一二年八月号）から第三十九号（二〇一五年八月号）まで連載したシリーズの「主人公」である【笑い仏】さんに再会するため、富岡町の浄林寺におじゃました。

たまたま寺に至る道路がすべて工事中につき通行止めであり、不確かな記憶をたどっての訪問だったため、寺の周囲を何周もして、なかなか寺にたどり着けないというおまけつきだったが、何とか無事再会できた。

この【笑い仏】さんは、鳥取県倉吉市在住の仏師・故山本竜門氏が作られた。「後背」が「がれき」で出来ているというめずらしい仏様でもある。

東日本大震災犠牲者を悼むため、鳥取県倉吉市から出発した【笑い仏】さんは、最終目的地の福島県富岡町の浄林寺を目指して、全国の二十一のお寺に逗留しつつ、三年三ヶ月もの長旅を終えて、ようやく到着した。二〇一五年八月だった。

到着直後に盛大な開眼法要が行われ、地元メディアでも取り上げられた。

その【笑い仏】さんは、以前お会いしたときと同じように微笑んでおられた。対面するだけでとても穏やかな気持ちになる仏様である。

寺の早川住職にもお会いして、いろいろお話を伺うことができた。

寺の大修繕を終えたばかりだということだった。

大修繕が終わるまで、【笑い仏】さんも別の場所に引っ越されていたという。寺で再会できたのは幸運というべきである。

ご住職の話で理解できないことがあった。

それは、「富岡も帰宅困難なので、ずい分さびれた」と言われた意味がよく分からなかったのだ。

浄林寺を出て、北上して、「帰宅困難地域につき立入禁止」の看板を見たときに、ようやく理解できた。

最大の犠牲者を出した石巻市は外見上の復興

その日はいわき市に戻り、仙台に向かい、宿泊して、その翌日に、東日本大震災で最大の犠牲者を出した石巻市の状況を見に行った。

大津波で多数の犠牲者を出した市内の南浜地区を、日和山の高台から見た。

「石巻南浜津波復興記念館」が遠くに見えた。今後、この一帯は、大震災を忘れない公園として整備される予定とのことだった。

この場所を除けば、いまではあの悲惨な大震災の記憶を呼び覚ますような痕跡は外見上は見えなくなった。

市内の道路を走ってみてもそうした痕跡は見えない。

ただ、詳細に見れば、大震災の津波で破壊された建物跡が想像される空き地はたくさんあった。

さらに足を延ばして、石巻漁港にも行ってみた。

ここは、すっかり新たな建物となり、また、周辺の関連業者の建物も再建され、大震災を想起させるものはない。

漁港には、たくさんの大型漁船も寄港していた。

活況を取り戻しつつあるように見えた。

今回の取材について

今回の取材は、何といっても、いまだに本格的な復興に着手できずに十一年が経過した福島に尽きる。

大震災から来月で満十二年になるのに、目の前に突き付けられた光景はまるで時間が止まったようだった。ある意味では、もっと悪くなっていたとも言える。

今回の取材を終えて、思い出したことがある。

七年前に浄林寺のご住職に、放射能に汚染された富岡の町を案内してもらった。

その時のご住職の政府に憤る姿と、今回の取材での、長い放射能汚染との戦いに多少疲れたような様子が、時間の経過を物語っていた。この苦闘は福島だけに背負わせるのではなく、国民全員で「共有」しなければならないと痛切に思った。

公園化工事が進む宮城県石巻市南浜地区遠景

"元通り"に見える石巻漁港

【東北再興】掲載の記事・写真・図表などの無断転載を禁止します。Copyright YUMUYU INC. All rights reserved.

日本とトルコとの深い関係をさらに前へ

トルコ南東部で起きた大地震

二月六日にトルコ南東部でM七・八の大きな地震が発生した。震源が浅い直下型地震だったことや耐震性が低い建物が多い地域だったこともあって大きな被害が出ている。地震から八日後の二月一三日の段階で、死者は隣国のシリアと合わせて実に三万人を超えたと報じられている。各国の救助隊が現地入りして懸命の救助活動を行っているが、日本からも地震発生の翌日七日に既に国際緊急援助隊・救助チームの先遣隊が到着、第二陣と合わせて七三名体制で救助活動を行っている。一〇日には国際緊急援助隊・医療チームも派遣され、医療面での活動も開始した。また、緊急援助物資も供与されることが決定した。

国際緊急援助隊を派遣するに当たり、岸田首相によるトルコのエルドアン大統領宛のお見舞いメッセージでも「過去の震災においても日本とトルコはお互いに支え合ってきました。トルコがこの困難を乗り越えるにあたり、日本は常にトルコの皆様とともにあります」と表明している。林外相によるトルコのチャヴシュオール外相宛のお見舞いメッセージにも「災害に伴う様々な痛みをよく理解し、これまでもお互いに助け合ってきました」とある。通り一遍のお見舞いとは違う、日本とトルコとのこれまでの関係性を反映したメッセージであることが窺える。

日本とトルコとの関係を決定づけた事件

だいぶ以前のデータになるが、二〇一二年に外務省が「トルコにおける対日世論調査」の結果を公表したことがある。それによれば、八三・二パーセントの人が「トルコと日本は友好関係にある」と答え、六一・六パーセントの人が「日本に関心がある」と答えている。「トルコにとって重要なパートナー」としても、イスラム諸国に次いで二番目に日本が挙がった。

トルコは親日国家と言われるが、この結果からはまさにそうした雰囲気が感じられる。ではなぜトルコがこのようにはるか遠く離れた日本に対してここまで親近の情を持ってくれているのか。そのきっかけとなったのは、一三三年前に起きたいわゆる「エルトゥールル号事件」である。一八九〇年に当時のオスマン帝国の軍艦エルトゥールル号が和歌山県の串本町沖で沈没した事件である。

それに先立つ一八八七年に小松宮彰仁親王同妃両殿下が欧州訪問の帰途にオスマン帝国を公式訪問したことに対する答礼として、皇帝アブデュル・ハミト二世が特使としてオスマン提督を日本に派遣した。

オスマン提督一行は、明治天皇に謁見し、皇帝から託されたトルコ最高勲章と贈り物を天皇に捧呈し、両国の修好という皇帝の意を天皇に伝えた。明治天皇も、使節に勲章を授け、饗宴を賜った。

帰路、一行を乗せたエルトゥールル号は台風に遭遇、岩礁に激突して機関が爆発し、提督以下五八一名もの人が亡くなる大海難事故となった。事故現場に近い紀伊大島の人々は、遭難者の救助に全力を挙げ、危険を顧みずエルトゥールル号から六九名を救出した。当初トルコの生存者を運んだ紀伊大島の樫野浦は小さな集落で、決して裕福な地区ではなかったにも関わらず、食料や衣類を提供し、普段は正月にしか食べない白米も炊き出し、時を知らせる鶏すらつぶして振る舞ったという。

明治天皇も知らせを受けて、政府を挙げての救援を命じ、トルコ人の生存者たちは手厚い看護を受けた後、日本海軍の軍艦で翌年イスタンブールに帰還した。また、トルコへの義捐金を募る動きが日本全国で沸き起こり、現在の貨幣価値で一億円とも言われる金額がトルコへ届けられたとのことである。

「エルトゥールル号事件」の恩返し

日本では決して多く知られているとは言えないこの出来事を、トルコでは小学校で学ぶのだそうで、この一件以来、トルコの日本に対する感情は極めて良好なのだそうである。一方の日本でも、このエルトゥールル号事件の慰霊塔で今も慰霊祭が行われている。そして、そこから一世紀近く経った一九八五年、今度は日本がトルコに助けてもらう事件が起きた。

イラン・イラク戦争の最中、イラクのフセイン大統領が、「今から四八時間後、イランの上空を飛ぶ飛行機を無差別攻撃する」との声明を発表した。各国は自国民を救出するための救援機を飛ばしたが、日本からの航空機の派遣は航行の安全が確保できないとの理由で見送られ、かと言って自衛隊機も飛ばせず、イラン在住の日本人は窮地に陥った。その窮地を救ってくれたのがトルコで、トルコは二機の救援機を送り、日本人二一五名全員がイランを脱出することができた。

当時イランの首都テヘランには六〇〇人余りのトルコ人がいたそうだが、それらのトルコ人は陸路でイランを離れたとのことである。なぜトルコが救いの手を差し伸べてくれたのか日本の皆が不思議に思っていたが、駐日トルコ大使のウトカン氏は、「エルトゥールル号の事故に際して、日本人がなしてくれた献身的な救助活動を、今もトルコの人たちは忘れていない。それで、テヘランで困っている日本人を助けようと、トルコ航空機が飛んだのだ」と語ったという。九五年も前のことをしっかりと忘れずにいてくれて、いわば恩返しをしてくれたのである。

東日本大震災の時の忘れられない支援

その後も両国の友好関係は続く。東京とほぼ同じ人口を擁するトルコ最大の都市イスタンブールは、ボスポラス海峡を挟んで東西に二分されている。アジア寄りの東側は主に住宅地域、ヨーロッパ寄りの西側は主に商業地域となっていて、イスタンブールの人は一九八〇年代に建設された第一ボスポラス橋を使って両岸を行き来していたが、慢性的な交通渋滞に悩まされて二本目の橋「第二ボスポラス橋」を建設すべく日本に支援を要請、日本がこれに応えて円借款の供与が決定、本州四国連絡橋のノウハウを活かして2年半という極めて短い工期で一九八八年、橋を完成させた。

続けて、トルコにとって長年の夢であったボスポラス海峡の海底を通る鉄道トンネルを造る「マルマライプロジェクト」をトルコ政府が立ち上げた。ここでも日本が円借款で資金を援助し、日本企業とトルコ企業のジョイントベンチャーを組織して二〇〇四年にトンネル建設に取り掛かり、二〇一三年についに両岸が海底トンネルでもつながったのである。

トルコも日本と同じ地震国である。一九九九年に起きた死者が一七〇〇〇人を超えた「マルマラ地震」でも日本は地震の翌日には国際緊急援助隊の第一陣を派遣して救助活動を行うと共に、医療提供やライフライン復旧支援なども行っている。

トルコとの関係で、東北にとって忘れられないのは、何と言ってもあの東日本大震災の時のことである。あの時トルコは、三二名の救助隊を派遣してくれた。救助隊は宮城県の多賀城市、石巻市雄勝町、七ヶ浜町で捜索活動を行った。しかも、福島第一原発事故が発生して各国の救助隊が相次いで撤退する中、トルコの救助隊は最後まで撤退せず、各国の救助隊の中で最長となる、三週間もの長きに亘って現地にとどまって活動を続けてくれたのである。果たして、同じ決断が自分がその立場にいたらできただろうか、と考える。異国の地で、経験したことのない原発事故が発生し、自分たちも被ばくするのではと恐れ、にも関わらずその場所に踏みとどまって活動を続ける、これは並大抵のことではない。その並大抵でないことを、あの時のトルコの救助隊の方々は行ってくれた。

このことを現地の人は今も忘れていない。七ヶ浜町では今回の地震を受けて、早くも翌二月七日に町内三箇所に募金箱を設置した。石巻市、多賀城市も八日に募金箱を設置して支援を募リ始めている。七ヶ浜町の寺澤薫町長は「オレンジ色の服を着たトルコの救助隊の姿を今でも覚えていて、とてもありがたく感じていた。当時の支援の恩返しになればと考えているので、ぜひ募金に協力してほしい」と話しているそうである。東北ではまさに、あの時の恩返しをと皆が考えている。私も微々たる金額ではあるが、取り急ぎトルコの赤新月社に寄付金を送金した。

寒河江市にある「トルコ館」

こうしてお互いがピンチになった際に助け合ってきたことが、冒頭の岸田首相や林外相のお見舞いメッセージにつながってくるのだが、できればここに書いてきたような経緯も併せて説明すれば、知らない人にもトルコとの関係の深さが分かってもらえてよかったのではないかと思う。

しかし、日本とトルコとの関係は、決してピンチの時ばかりのものではない。日頃からの交流ももちろんある。最も有名なのは、「エルトゥールル号事件」がきっかけとなった、紀伊大島のある和歌山県串本町による交流だが、東北にもトルコと関わりのある自治体がある。山形県の寒河江市である。寒河江市はトルコのギレスン市と姉妹都市となっている。ギレスン市はさくらんぼの原産地であり、「日本一さくらんぼの里」を標榜する寒河江市が、さくらんぼを通して友好親善を深めるためとして、一九八八年に姉妹都市となったのである。

寒河江市にある「道の駅寒河江チェリーランド」には「トルコ館」がある。オスマントルコ時代をイメージした建物で、内装や装飾、調度品などは全てトルコから取り寄せたものだとのことである。館内では、トルコの陶器、ガラス製品、銅製品などの工芸品や織物、お酒類などの特産品の販売が行われている（現在、コロナ禍により休館中）。

地震が起きても大丈夫なように助け合う

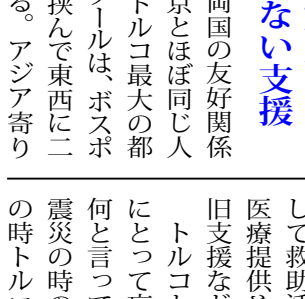
「エルトゥールル号事件」のことでも分かるが、トルコの側では日本のことをとても大事に思ってくれているのに対して、日本の我々はそこまでトルコのことをよく知っているわけではない印象がある。せっかくアジアの東の端の国と西の端の国が、縁あって良好な関係を築いてきたのであるから、それを今後さらに発展させていきたいものである。

とりわけ、日本ができることとして、今回の地震で被害を受けたトルコ南東部の復興への支援が挙げられる。同地域には耐震性の低い建物が多く、それが被害を拡大させたと先に紹介したが、復興に当たっては、日本の優れた耐震技術を提供して、次に起きる地震では今回よりも被害が大きく減るよう支援するのが、まさに我々のできる最良の支援であると思われる。

日本もトルコも地震を避けては通れない国である。地震が起きた時に助け合う、から一歩進んで、地震が起きても大丈夫なように助け合う、それがこれからのお互いの望ましい関係ではないかと考える。

執筆者紹介

大友浩平
（おおともこうへい）
奥州仙臺の住人。普段は出版社に勤務。東北の人と自然と文化が大好き。趣味は自転車と歌と旅。
「東北ブログ」
http://blog.livedoor.jp/anagma5/



Facebook
https://www.facebook.com/kouhei.ootomo

【東北復興】掲載の記事・写真・図表などの無断転載を禁止します。Copyright YUMUYU INC. All rights reserved.

東北の離小島から打ち上がる！とある「人口増加」の狼煙の事

昨年末、実に三年振り程に、東京へ出かけた。最早馴染みとも共存状態とも言える、長きに渡る感染症への対処の為もあるが、単純に特に用事がなかった、という事でもある。今回、その東京で基本短期間ながら新しい活動を始める機会があり、久しく完全に離れていたこの地域との関係にも変化が起こる可能性を感じている。かと言って、再びこの巨大都市の市民になろうという気は今のところはないのだが、ではこの先も私は仙台に住むかどうか、も定かではない。これからの時代、過疎化して住み難くなった地方から、空きあらば仙台や大東京といった都市部の深き懐へと逃げ込もうとする人々は増加するだろう―その時、私は何処に住み、別の何処かの地域と何らかの新たな関係を築き得ているのであろうか？

奥羽越現像（おうえつげんぞう）氏紹介

一九七〇年山形県鶴岡市生。札幌、東京を経て、全国の旅の末、仙台に移住。どの本屋に入っても、とりあえず郷土本の棚に向かって立ち読みを始める東北好きである。

そのような、ほぼ考えない日もなくなっているような、最早ありふれた自らへの命題的な問の答、そのヒントを探してみたい。

※

仙台ほどの規模の地方都市に住んでいると、よく言われるように特に単身生活においても何かと便利で困らない上に、東京のような巨大都市に住んでいれば頻繁に感じられる「都会から脱出したい」という衝動のようなものも少ない。その衝動とは、個人的な経験から考察するならば例えば都市という人工的空間への憧れ・期待とそれが裏切られた際の失望感、不快感が慢性的になった場合と、それら負の感情を緩和する為の環境が不足している場合に起こる。ただしそれは逆に所謂田舎・自然の中に暮らす場合も同様でやはりその環境への失望感、不快感が続けば「田舎などもうたくさんだ」となるのである。

東京でも都心過ぎず郊外過ぎない絶妙の地域が、そのような「脱出衝動」を抑え、定住の比率を上げていくとともに、都市と緑地が隣り合っているというだけではない、都市としても緑地としてもより理想的な形態を目指す、そこから新しい都市、居住地帯というものが生まれてくる可能性をより内包しているとは言えるのかも知れない。

しかしながら、いくら理想の居住環境に近づけたとしても、その中に溺れて外の世界が見えなくなり、無関心・思考停止状態になってしまってもつまらない。

先頃、岩手県盛岡市が米有力紙で世界中でも特に今訪れるべき都市として高く評価され話題となったが、個人的に気になったのは同じ東北の、大都市仙台における反応である。恐らくは「何故？この仙台を差し置いて・・」と思った市民も少なくなかったのではないだろうか。

だが世界からの評価に偽りはなく、仙台はあらためて自らに欠けている部分について思いを馳せる事になったのではないだろうか。

己に何が足りないのか、あるいは己の本当の強みは何なのか。それを知るには東北を見て廻る事―実際にクルマや高速バスで巡る事はもちろん、インターネット上で各地と交流し、心の旅をする事もまた有意義に違いない。都市と都市はもちろん、あらゆる町や村を循環し、人々や文化が行き来する事が、東北のあちらこちらで何か新しい風や波を巻き起こす契機となるかも知れない。

そのような事を考えていると、ある一冊の本の題名が頭に思い浮かんだ。高橋博之著『都市と地方をかきまぜる』（光文社新書）である。五年以上前の出版になるが、養老孟司氏の説く「新参勤交代論」―都会の人は田舎で、田舎の人は都会で一定期間住む仕組みを作るのが良いとする思想の実践とも言うべき書で、作り手の物語を知ってもらい実物を食べてもらうという「食べ物付きマガジン」の発想は世間を驚かせた。都市の課題の答は地方に、地方の課題の答は都市にあり互いが互いとなり相互理解を深めていく先に思いがけぬ未来が見えてくるとする本書だが、更なる白眉として、人口減を嘆くより「関係人口」を増やせと説く点もあげられる。移住でも観光でもない、観光以上・移住未満のその地域における各々の存在スタイルだ。

身近な例として、東北の友人たちの話をしたい。数年前まで私自身も参加していた、アイリッシュパブでのケルト伝統音楽セッションにおける演奏家たちだ。

彼らの多くは岩手・宮城県内から仙台に集まっていたが、近年市内にて会場としていた店が廃業した為に彼らの活動もまた中断したものの、最近になって青森県弘前市に新たなアイリッシュパブが開店したというのではるばる仙台や宮古市から月一回で集まり演奏を行っているのだという。東北ならではの厳しい文化的・人材的環境事情の結果でもあるが、当人たちにすれば特色ある自分たちの音楽を広め津軽という決して身近ではなかった地域の人々と交流する楽しみがあるとの事で活動の意気は高い。

その一方で、私自身は実家の父が亡くなっても郷里である庄内・湯野浜温泉の家業は継がず、地域の衰退に対して何のアクションもしないままであり、長年通い詰めている岩手県遠野市でも語り合う友人たちはいるものの、祭は専ら観覧を楽しむのみで郷土芸能団体の一員になったり、何か現地で仕事を始めたりという更に一歩踏み込むような事は、性格的な要因もあるせいか、遠慮し続けている。

関係人口について、その地域に対する熱烈なファンであっても決して「地域を良くしよう」とか「地方創生を」とかを目的にした層ではなく、また「地域を助けてくれる人を募集」するのが関係人口創出ではないと、地域観光振興の関係者は言う。そう考えれば、本当にやりたい事をやっていて、結果的に弘前を盛り上げている、演奏家の友人たちの姿はまさに理想形と言えるのかも知れない。

また一方で、この関係人口について、他ならぬ庄内においてこれまで見逃していた注目すべき地域がある事にあらためて気づいた。

山形県唯一の有人離島として知られる飛島である。

飛島というと山形市や仙台で飛島産のトビウオを使った「あご出汁」のラーメンを売りとした「亜呉屋（あごや）」が知られるが、随分前に何かの調査で来島した女子大学生が、島に魅力を感じて移住した、という話を聞いて気になった事はあった。

実は最近、飛島に関する地元でのある研究成果があり、あらためて意識させられていたのだった。酒田市の郷土史家・杉原丈夫氏による自費出版「飛島と北前船」である。

そこでの興味深い箇所が飛島はかつて北前船の酒田港への風待ち・潮待ち港、つまり一時的な待機所としての役割を果たしていたとされていたが、実際には様々な規制や罰則が待ち構えていた本土の港に対し、ここでは停泊した船同士や島住民間でも自由な交易、更に言えば「密貿易」が行えた事で裏の本命港だったという驚くべき可能性を説いているのである。

ここには古代からの落ち武者伝説や更なる謎の渡来者が遺したと思われる解読不能の文字などの遺構も残り、また当時の客船帳の全国各地の地名記録や見事な筆跡から島民はかなりの博識であった事が窺え、彼ら自身もまた海洋広く移動していた可能性も考えれば、今は久しく「裏日本」と捉えられる日本海側世界が全く違う姿にイメージされるそのような未来が遠くないかも知れないのである。

さて、住民の平均年齢約七〇歳であるという飛島は二〇年後には現在の島民が全員いなくなっているだろうとも言う。無論これはこの島のみならずこの国の地方全体、多くの自治体にも近い形で訪れる状況であるとも言え、実際に三重県志摩市のかつて真珠養殖で栄えた離島・間崎島では地域活性化や所謂「島おこし」などは敢えて考えず、逆に衰退する地域コミュニティを如何にして閉じるかという「しまの終活」プロジェクトが進められているという。ところが、一方の飛島では一味違う状況で何やら凄い事になっており、数年振りに意識し調べてみた私は実に驚かされた。近年飛島ではむしろ移住者が急増し、しかも従来の島民も交えて様々な活動が展開されているというのである。

二〇一三年、数人のU・Iターンの若者らによって設立された「合同会社とびしま」。その事業としては漁業への助力と技術・文化の継承・記録、海岸清掃などの環境保全・整備、特産品などの商品開発、カフェなどの外食事業、宿泊事業にツアー企画などの観光事業と多岐に渡るが、その根幹には島民からの相談や希望などから立ち上がった地道な活動があるという。特筆すべきは近年導入したという、かの有名な米・パタゴニア社のそれよりも長い三か月間の有給休暇制度である。代表者らは語る。

「人材を囲い込もうとしない方が、逆に囲い込める気がするんです。」

「社員がもう少し楽に地域に関われるようにしたい」

「ずっと島にいるのは大変な事なので、島に縛り付けるのではなく、島・本土の境界を越えた事業システムを構築する人材に育ってくれる方向へと期待したい」

やはり、飛島がかつて日本海交易における裏の本命港であり、特別の島であったという歴史的仮説は正しいのだろう―その末裔たちの先進的なアイディアは止まるところを知らない。

彼らが新たな事業として展開する「課題解決型ツーリズム」は、芸術作品の制作から島での起業、エネルギーを使わない生活の実践などを体験するというもので、人生を模索する旅人らの志の糧となればとし、

「島の最大の観光資源は『課題』である」とまで宣言するのである。そうであるならば、東北はこれまで以上に、そこにあるだけで壮大なる観光立国であるという事ではないだろうか。

※

「将来的に、百人の新しい自治体を作る」事を目標とする、という飛島の新世代たち。見事なまでの「関係人口のシステム化」が今、かつての我が足元近くで成されようとしているが、考えてみれば島の対岸・湯野浜もまた、陸続きではあっても実態は一個の島のような存在なのだ。ここでも同じような変革が、近い将来に起きるだろうか？私は、やはり傍観するのみか、それとも、ここや、他のどこかの、関係人口となれるのだろうか？人々の姿は急速に少なくなっていこうともむしろますます面白くなっていくに違いない東北に我が興味の尽きる事はない。

2019年、ドキュメンタリー映画も制作されていた飛島の物語

【東北再興】掲載の記事・写真・図表などの無断転載を禁止します。Copyright YUMUYU INC. All rights reserved.

狛犬に綿帽子

上郷からの早池峰山

トラツグミ（鵺）

炎

雪の日の荒神社

シリーズ　遠野の自然

「遠野の立春」

遠野 1000 景より

まだ昨年の激動の記憶を引きずり、何かが起きるのではないかと身構えている。

幸いにもここまでは大きな出来事はない。少しほっとしていた。

ところがトルコで大地震が発生し、建物は壊滅し、多くの犠牲者が出ている。この記事を書いている段階ですでに三万人を超えている。

来月十一日で東日本大震災から満十二年。あのときは大地震、大津波、大火事、原発爆発と放射能漏えいがあり、地獄絵図を見るようだったのを思い出す。もう二度とあのような災害は経験したくない。穏やかな大自然の循環と、さまざまな人災が起きないことを願うばかりである。

獣道

石塔（雷神）

ウサギの足跡

【東北再興】掲載の記事・写真・図表などの無断転載を禁止します。Copyright YUMUYU INC. All rights reserved.

【新シリーズ・三陸酒海鮮会】の開催ご報告と今後のお知らせ

第49回は1/21、海外から参加あり、160種日本酒飲み放題で大盛会！
第50回は2/18に、第51回は3/20に開催予定、4月以降は企画中

【基本方針】

① 会は原則として、月一回開催といたします

② 毎回会場を変えての少人数開催といたします。

③ 今後は、当面の間、毎回、「割り勘」を基本とした料金でお願いいたします。

第49回三陸酒海鮮会　五反田【野崎屋】篇・・・「東北地酒から開始して160種の日本酒に挑戦」

160 銘柄日本酒飲み放題メニューの東北篇の一部

AKABU702 と NO.6

保冷庫は日本酒だらけ

第 50 回三陸酒海鮮会　【飛梅】神田篇
2023・2・18(土)　17：00～20：00

三陸産牡蠣食べくらべ・・・イメージ

第 51 回三陸酒海鮮会　【むさし乃】東神田篇
2022・3・20(月)　19：00～22：00

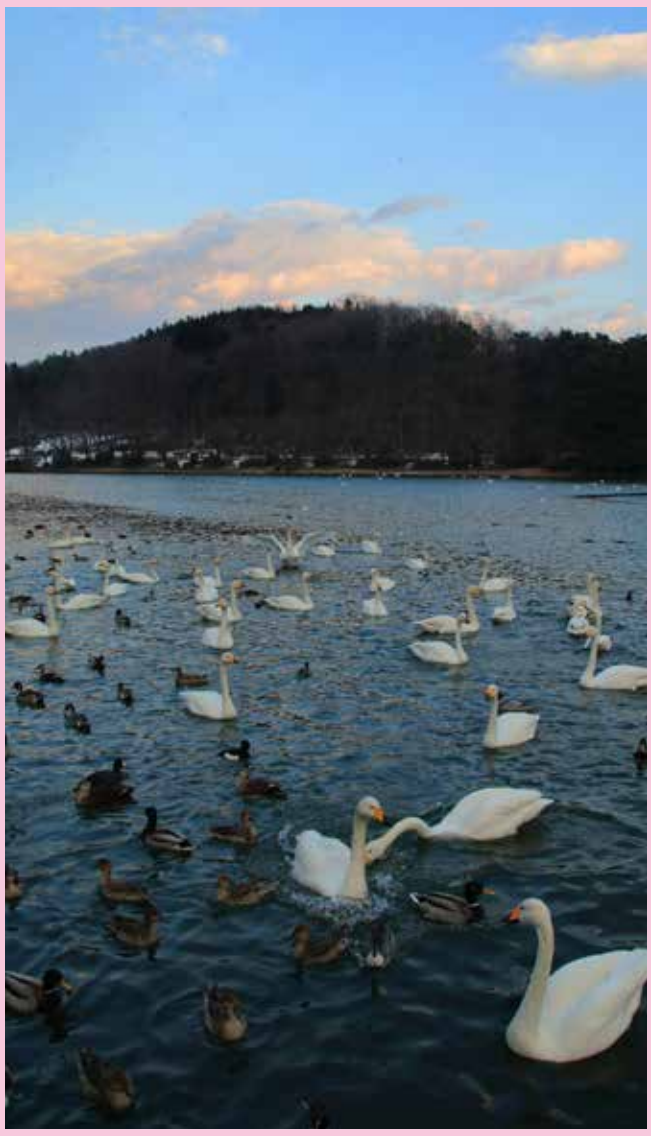
十四代と新政が待っている！

【東北再興】掲載の記事・写真・図表などの無断転載を禁止します。Copyright YUMUYU INC. All rights reserved.

写真でお伝えする
東北の風景

【東北の2月】

写真撮影　尾崎匠



【東北再興】掲載の記事・写真・図表などの無断転載を禁止します。Copyright YUMUYU INC. All rights reserved.